

来ており高低弁別、協和判断の項目はよく出来ていなかった。これは高低弁別が強弱判断とまちがえやすい点に原因があり、例えば一点(4)を強く、二点(3)を弱く発音する為強い方の音が高く感じやすい事、また二つの音群(旋律)の音の進行傾向が漸次高くかまた低くかへ移行する状態を判別させるといった高低弁別は幼児に無理なようであった。音楽テストの評価段階で中以上の子どもは、二年生長児が八五%、一年生長児は五三、四%でやはり二年保育の効果をおらわしていた。今後は音の高低もいろいろの遊びに取り入れれたり和音遊びにも力をいれてゆきたいと思っている。

なお私共の園では年長児にだけ木琴を取り入れ、毎日、自由遊びの時間に指導しているので木琴の演奏能力と音楽テストの結果と比較してみたいと思う。一年間の木琴指導の結果、その演奏能力は三段階にわけられ、まず良く出来る組は①組(教師がピアノを弾き階名でうたつてあげると、すぐ旋律で弾くことが出来る暗符も早い)、中位の組を②組(手を取って指導し、練習時間を①組より多く必要)、出来ない組を③組(なかなか旋律はむりて主にリズム打、拍子打(トレモロ等で))をして他の組と合奏)。以上各組の音楽テストの評価はやはり音楽テストの上位の子どもは技能面においてもまた知能面(田中B式知能テストの結果と比較)においても(中)以上のよい成績を示していた。しかし田中音楽素質診断テストそのものも絶対的実とはいきれぬ面もあり、正確な測定はまだまだむずかしいが、大体の事を知ることが出来た。また木琴を取り入れた為リズム感を養うことが出来、合奏も豊かになり子ども達が非常に音楽を好きになった点、よかったと思っている。

一年間の木琴指導の記録は抄録を参照されたい。

(大会発表論文抄録19—21頁)

幼児画について

大阪市立大学 小西勝一郎
 並河信子
 大阪教育研究所 山田聖子
 千代田高等学校 山下和子
 付属幼稚園 車谷正子

全体的な計画及び内容

幼児の創造活動としての絵画については、すでに多くの研究が発表されているが、我々も今回幼稚園において保育の形体をなるべくくずさぬようにして自由題の画を継続的に一年間描かせ、特に一年の変化を考察しつつこれを多方面より分析した。即ち描画活動は内容、色彩、構成、其の他多くの面から分析できるが、それらが一年間に発達の、また季節的にどのように変化するか、さらに性別、智能の高低、性格等による相違を知り、保育の現場における比較的長期にわたる資料をもとにして幼児画の実態を把握し今後の保育の参考に供せんとした。

調査対象は上表の通り。三三年四月より三四年三月まで一年間、毎週木曜日に全員

		男	女	I Q高	I Q低	total
人	数	16	21	19	18	37
CA	平均	6.3年	6.3年	6.3年	6.3年	6.3年
	SD	0.24	0.31	0.29	0.25	0.275
I Q	平均	99.19	105.48	112.11	92.89	102.73
	SD	13.35	10.10	9.10	5.30	11.59

二組に分け、自由画を一枚ずつ描かせた。
ただし月により枚数にはちがいがあ

材料はクレパス一六色、画用紙は三八センチ×二七センチを用い、他はすべて子どもの自由にまかせた。担任教諭二名が一週間の行動像、描画活動の場における子どもの選んだ坐席、描画活動、他児に対する態度等、集団面における活動を出来るだけ詳しく記録した。

このような方法で九八七枚の画が集った。絵画の分析においては常に総合的な考察をせねばならぬが今回は内容を中心として報告する。内容の分類にはいろいろ考えられるが我々は幼児の命名を主に自然、植物、建物、(建設設備も含む)人物(人形を含む)、動物、事物、乗物、その他、不明の九項目にわけた。但し上手下手等のような質的なものは考慮していない。また一人で数項目を同時に描いているのでそれぞれ別個に数えて整理をしている。

結果は月により差異はあるが一年間総合的にみて多いものから述べる。1 自然、2 人物、3 植物、4 建物、5 事物、6 動物、7 乗物、8 その他、9 不明の順位になった。対象の生活環境は半農地区なので大阪市内の幼児の絵画内容とはどのような相違があるかを知らる為昭和二八年度大阪市立幼稚園教育研究会による調査資料と比較を試みた。大阪市の調査に準じ期間は四月から九月までとした。結果は三位までをあげると本研究男子は1、自然二〇%、2、建物一四%、3、動物一三%、大阪市男子は1、乗物三八%、2、其の他二七%、3 建物一五%、となり本研究女子は1、人物、自然一九%、2、植物一七%、3、建物一五%、で大阪市女子は1、人物五六%、2、其の他、自然、建物ともに一一%、となっている。即ち女子では両研究とも人物が第一位だがパーセントにおいては非常な差がみられる。また大阪市の分類では自然の中に植物も含まれてい

るようなので本研究でも合計した場合男子女子共に第一位は自然となった。大阪市の男子で一位の乗物は本研究では七位一〇%となっている。大阪市の研究とは調査方法に多少差異があるので確定したことは言えないが地域社会の相違による影響が描画にも表れていることを示すものであり、描画内容とおしても生活経験が理解されると思う。この点はカリキュラム構成に際しても考慮する必要がある。またさらに項目別に学期ごとの変化をみると人物、建物、事物は一学期より三学期と非常に増加し、其の他では多少の増加がみられた。また不明では一学期が多く二学期三学期とは同じで減少している。また自然及び乗物では二学期が、また動物では一学期が一番多く描かれている。一三学期と描かれる内容の種類が多くなってきたる事また不明が減少していることは発達との関係によるのではないかと思われるが確定したことはわからない。

今回はこのような結果になったが内容については質的に分析してないので別の分析をした場合また対象が一園の調査であるからもっと多くの幼児を対象にして調査した時ではまた違った結果が出たとも考えられるが、それは今後の問題にしたいと思う。

性別、知能、性格との関係 以上の調査対象及び描画資料を用いてここでは、男女差、知能の高低、性格によって描かれた内容にどのような差異がみられるかを明らかにしようとした。

智能検査は鈴木ビネー法により、IQ一〇〇を中心として高低二群に分けた。高群はIQ一〇一―一三六の範囲に、低群はIQ八〇―一〇〇の範囲を示している。

幼児の行動特性は、FCBSを参考にし、幼稚園全児を対象にして、担任教師が幼児の日常観察に基き評価し、その結果をT得点に換算し、各特性項目ごとに平均T得点を中心に上下五点を単位とし

てそれより高いもの低いものの両群を選んだ。なお性別及びIQの高低別から見た両群のC、A、IQの平均は、表のようにおのおの群の間に男女の智能の場合をのぞいては、大きい違いはない。

1 性別による比較の結果、有意差を示したもののみについてみると、一年間を通じては、植物、人物、乗物に比較的多くの月に違いがみられ、男子に比べて女子に植物、人物が多く、乗物ではすべて男子が多い。これは、一般に考えられるような傾向がみとめられた。ほかに建物では九月に、事物では六月に各々女子が多く、その他というカテゴリーでは、九月、一二月、一月にすべて男子が多い。

これを項目別にみると、自然、動物、不明に差がみられた。なお五月ほどの項目にも全く差がみられなかった。これは、五月には行事が多く同一環境の場が多かったことに関係があるのではないかと思われる。一年間の全体の平均を見ても、やはり植物、人物、乗物に、先にふれたような男女差がみられた。

2 智能の高低による比較の結果、有意差があるか検定したところ、智能の高いものが植物を七月に多くかき、智能の低いものは、人物を七月、動物を六月、不明を四月五月六月に多くかいている。

これによると、各月を通じて智能の高低に著しい差を示すものはごくわずかである。一年間総合的にみて、全く有意差はない。有意差は一学期にのみみられ、二学期以後は全くみられないのとおもしろい傾向だと思ふ。これはもつとよくしらべてみたいと思ふ。

3 行動特性について、有意差のあるものを見るため、三〇の行動特性のうち、今回は、攻撃性、快活性、活動性、社会性、情緒反応、独創性、計画性、被暗示性、興味の持続性の九特性について検討した。各内容を各項目ごとに、一年間にかかれた数を総数で除して一〇〇倍したものを各自の各項目の得点とし、この得点の差

によって、各特性の高群と、低群を比較した。九項目のうち、四項目に差がみられた。有意な差を示したものは、次の通りである。社会性では人物、動物、その他に、被暗示性興味の持続性、計画性では各々不明に有意差がみられた。即ち、社会性のある子ども（他の子どもとかグループに向けられる）は、動物とか特定の分類に入らない、其の他のものが著しく多く、社会性にかけている子ども（興味が自己に向けられる個人的な子ども）は人物が多い。また暗示にかかりやすい、興味の持続出来ない、計画性のないこのような子どもは不明のえが多かった。次に有意差はなかったが、独創的な子どもは動物、その他が多く、活動的な子どもも其の他が多くみられた。上述のように、描画内容に若干の差異がみられた。とくに今回は性別、行動特性に有意差がみられるようである。この結果は人数も少なく、反省すべき点多いと思われる。更に今後、色彩、スペース、運動などの面についても分析してゆきたいと思つてゐる。

(大会発表論文抄録15—18頁)

幼児の中断行動における反応

大阪樟蔭女子大学児童研究所

大西憲明・津田典子

永瀬保子・高岡漢子

目的 製作の場合、自由でのびのびとした雰囲気まで誘導されれば、幼児は容易に自己表現を試み、自主的に活動し、自分から問題を発見し、さらによりよい解決や構成の工夫を企てること予想される。だが、こういう場面に導く保育者の適切な助言や指導のありかたには、理論的には種々の要因や技術が考えられ、既に多くの